

新潟の原風景といえば、どこまでも広がる豊かな水田。この景色は、確かに行き渡る水があって作られています。これは、水と農業、そして新潟の未来を考えるシリーズです。



新潟市在住のイラストレーター木原四郎さんが、阿賀野川左岸地区を支える水の流れを訪ね歩き、風景や人とのふれあいを描いていただきました。

水利を歩く

木原四郎の
in 阿賀野川左岸



五泉市世野町の株式会社蛇場農産を訪ねた。お話を聞いたのは代表の伊藤長義さんと息子の伊藤国義さん。蛇場農産は稻作、野菜の栽培、また、息子の国義さんは株式会社蛇場緑地建設でスポーツ施設や造園園などを手がけている。

案内していただいた五泉市長橋の田園には雲がかかった白山が見え、稲穂が風にゆれていた。



イラストレーター
木原 四郎さん

1946年、佐賀県佐賀市出身。
「旅するイラストレーター」として新潟県内を歩き、風景や人物を描き続ける。独特の柔らかいタッチのイラストと心温まる文章で人とモノとの出会いを紹介し、人気を集め。17年にわたり、NHK総合「金よう夜 きっと新潟」に出演した。



新潟大学名譽教授
伊藤 忠雄さん

1944年、新発田市生まれ。67年、新潟大学農学部卒。専門は農業経営学。同大教授、副学長などを経て2010年に退職。15年3月まで放送大学新潟学習センター所長。12年から5年間、県内の先進的農業経営者を講師に招き、実践的経営論を議論する「新潟農業経営塾」を主宰。現在、新潟市農業活性化研究センター名誉所長として新潟農業の課題などを問題提起している。

県境からの清流を集めて流れれる阿賀野川の流量は、国内の大河川の中で最も安定しているといわれる。その恵みを川幅いっぱいの206㍍に手を広げてせき止め、左岸の用水路に配水する阿賀野川頭首工の取水能力は県内最大規模だ。この水利施設の設置で躍進してきた左岸地域の農業は、さらに新たな方向に挑戦を始めている。水田の大区画化とスマート農業の導入だ。その成果は、やがて野菜など園芸部門にも及ぶだろう。新时代への確かな胎動に、昂乙女たちの弾んだ声が聞こえてくるようだ。

この土質がサトイモやチヨーリップ球根などの好適地となった。地下に育つこれらの作物は、常態的に山から吹き下ろす「だいの風」の被害を受けにくく、生産者の精勤とも相まって、五泉地域は県内有数の園芸産地へと発展してきた。

この左岸地域で安定的な農業生産が可能になるのは、阿賀野川の築堤整備と、その同時期に始まる国営阿賀野川用水農業水利事業の完工以降のことである。特に、用水改良事業では阿賀野川、早出川の二つの頭首工と幹線用水路などの造成により、水不足に悩まされてきた稻作地域の農業水利は大きく改善された。一方、古来より頻発した水害は、その副産物として左岸地域に水はけの良い肥沃（ひよく）な砂質土壤を大量に堆積させた。この土質がサトイモやチヨーリップ球根などの好適地となった。地下に育つこれらの作物は、常態的に山から吹き下ろす「だいの風」の被害を受けにくく、生産者の精勤とも相まって、五泉地域は県内有数の園芸産地へと発展してきた。

有数の園芸産地に水害常襲地が一変

スーパーや直売所に名産の「昂乙女（さかとうめ）」が出来る季節になってしまった。丸くて形が良く、皮をむけば色白でめ細かい。

このサトイモは、五泉地域の生産者が大和早生という品種に長年の改良を重ねてトップブランドに育て上げた愛娘なのだ。

この地位を守るためにJA新潟みらいでは「昂乙女憲章」という栽培基準を設けて出荷を続け、今や販売額が3億円を超す県内最大の産地となっている。

ところで、築堤以前の阿賀野川は、馬下槽（じょうしゃく）流付近から流路は安定せず、水害の常襲（じょうしゅう）地帯であった。

今年の台風19号でも、阿賀野川は大量的雨で牙をむき、河川敷のサトイモ畠にも



